

デンマークの特別学校におけるペダゴグの役割

山浦祐香¹・是永かな子²

(¹高知大学教職大学院・²高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門,高知ギルバーク発達神経精神医学センター)

The Role of 'Pædagog' at Special Schools in Denmark

Yuka Yamaura¹ and Kanako Korenaga²

¹ Programs for Advanced Professional Development in Teacher Education, Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Kochi University,² Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster Education Unit · Kochi Gillberg Neuropsychiatry Centre

Abstract : In this study, we analyzed the results of research studies based on field surveys, including the role and expertise of Pædagog in Danish special schools, as well as the perspective of transition support system's point of view.

The followings had been clarified in this study. The role and specialization of Pædagog at the special school seems to be integrated with the role and specialization of teachers, considering that the team teaching is highly conscious of class management. However, the difference between Pædagogs and teachers' roles and expertise is that teachers are mainly teaching subjects they are responsible for a child's learning, while Pædagogs focus on the children's development themselves. They emphasize on how children develop, grow and become members of society.

We infer that Pædagog's expertise is to teach skills necessary outside of school, such as social skills, behavior after going out school to society, and emotional control. Moreover, an important role of Pædagog at school is assisting the teachers in studying instructions. They encourage the children to sit down and listen to teachers when teachers were explaining.

With regards to transition support, teachers and Pædagog can visit preschool or educational institutions before school to see the actual condition of children and the staff treatment, as well as having meetings with related staffs. School teachers and Pædagog can visit preschool or educational institutions before school so that school staffs can be ready to accept the children and prepare teaching environments in advance.

From the above, Pædagog improves the environment of schools so that children can spend better school life when collaborating with teachers. We can consider that in the scene where Pædagog is the main teacher, they will teach about daily life situations with society and future in mind. On the other hand, in the scene of where teachers are the main position and the children were learning subjects, the Pædagog is expected to assist the teacher.

キーワード : デンマーク ペダゴグ 特別学校

Key words: Denmark, 'Pædagog', Special school

1. 問題の所在と研究の目的

デンマークの就学前教育や教育の特徴の一つは、幼稚園・保育園が社会省が管轄する就学前教育機関に一本化されていること、公立の義務教育学校であり日本の小中学校に相当する国民学校(Folkeskole,以下,国民学校)の9年間に加えて2009年から就学前学級(0年生)が義務化されていることである。就学前学級では、主として保育士資格や生活指導員資格を意味するペダゴグ(Pædagog)が指導を担当し、国民学校教員も指導に参加する。

現在のデンマークの特別教育は、特別学校や国民学校に併設する特別学級、通常学校の中のインクルーシブ教育という形態で展開している。就学前段階では、障害児専門の就学前教育機関のほか、通常の就学前教育機関に在籍しながらインクルーシブ保育を受けている子どもも多い。学校の運営に関しては自治体の意向が強く反映され、自治体によって差がある。特別学校では少人数学級での教育が進められており、授業方法は子どもが主体的に発表することなどを通じて、グループ学習、相互学習を展開している。特別教育でもディベート活動などを通して、互いに協議・協調し、考える教育を重視している。

デンマークの特別学校では、教員の他、ペダゴグが授業や学校生活を支援する体制が構築されている。ペダゴグの資格を習得するためには、専門大学で3年半の課程を修了しなくてはならない¹。デンマークではペダゴグは就学前教育機関のみならず、学童保育、義務教育学校としての国民学校の低学年や特別学校で勤務していることが多い。特別学校に勤務するペダゴグは、社会教育ペダゴグ(socialpædagog)と特別教育ペダゴグ(specialpædagog)の分野の知識が求められる。2014年の教育改革において、特別学校に務めるペダゴグは、特別な教育的ニーズを持つ子どもや若者、社会的困難のある人、精神障害および身体障害のある人に対する知識が求められることが明示された²。

デンマークの就学前教育において、ペダゴグは子どもとの対話を重視していたり、子どもの自己の価値や自分の存在を肯定する感覚「セルヴェア(Selvværd)」を重視して、評価したりしていることも特色であろう³。デンマークにおいては、多くの子どもが6カ月から2歳までは保育所または保育ママ、3歳児から5歳児では就学前教育機関を利用している。

デンマークでは出産後、早い時期に職場復帰を望む女性が多いため、0~6歳までの児童の生活指導を担うペダゴグの役割は大きい。ペダゴグは子どもの保護者から信任されて、近代的な社会に適応するように伝統的な家庭教育を一端を担っている⁴。就学前学級では、遊びや他の子どもとの共同活動を通じて学校生活への準備を行う。保育者でもあるペダゴグの多くは、就学前教育機関、国民学校の就学前学級さらには学童保育センターで子どもの教育と支援を担当する⁵。

以上を踏まえて本稿では、デンマークの特別学校に注目して、特別学校におけるペダゴグの役割を検討する。また就学前教育機関の施設学校間の引継ぎや移行支援体制に関しても調査を行う。具体的には2018年12月から2019年3月に現地調査を実施したRoskilde自治体(Roskilde kommune)、Copenhagen自治体(Copenhagen kommune)のそれぞれの特別学校の実践を分析することとし、その実相を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

本研究では聞き取り調査と文献検討を行う。分析する自治体はRoskilde自治体、Copenhagen自治体のValby地区、とØsterbro地区とした。

Roskilde自治体は、デンマークのシェラン地域にある都市であり、デンマークで10番目に大きい都市である。世界遺産に登録されたロスキレ大聖堂がある。2016年の人口は50,046人、面積は211.99 km²である。シェラン島の北部にあり、ロスキレ・フィヨルドの最奥に位置している。

Copenhagen自治体は、デンマークの首都であり、デンマーク東部のシェラン島東に位置しコペンハーゲン湾に面する。Copenhagen自治体は、10の公認地区(Indre By, Østerbro, Nørrebro, Vesterbro / Kongens Enghave, Valby, Vanløse, Brønshøj-Husum, Bispebjerg, AmagerØst, Amager Vest)によって構成されており、2017年の人口は602,500人、面積は88.25 km²である。そのうちValby地区は、コペンハーゲンの10の公認地区の1つである。コペンハーゲン市の南西にあり、人口46,161人、面積は9.23km²である。Østerbro地区もコペンハーゲンの10の公認地区

の1つであり、北東に位置する。裕福な地域の1つでもあり、人口は68,769人、面積は11.84km²である(図1参照)。

Roskilde 自治体において調査を行ったのは、2019年1月8日9時30分から10時30分であった。訪問先は特別学校 SCR(special center roskilde) Fjordskolen Lysholm(Hyrdehøj 5,Roskilde)である。聞き取りの時間がなかったため、観察のみであった。

Copenhagen 自治体において調査を行ったのは、まず1校目として2019年3月5日8時00分から14時00分に、Valby 地区の特別学校 Frejaskole(Rughavevej 6,Valby)を訪れた。聞き取り調査対象者は、4・5・6年生の学級の教員とペダゴゴであり、教員とペダゴゴの違いとペダゴゴの専門性について聞いた。次に2校目として、2019年4月2日8時00分から15時00分に、Østerbro 地区の特別学校 Øresundsskolen(Carl Niensens Allé 33,Østerbro)に訪問した。聞き取り調査対象者は、12歳から14歳の子どもが在籍していた学級の教員とペダゴゴであり、教員とペダゴゴの違いとペダゴゴの専門性について聞いた。



図1 コペンハーゲン自治体の地区区分

出典：Copenhagen Municipality,Wikipedia,
https://en.wikipedia.org/wiki/Copenhagen_Municipality(2019/10/28 参照)。

3. 結果

3.1. SCR(Special Center Roskilde) Fjordskolen Lysholm 特別学校

3.1.1. 訪問調査結果

子ども数は56人、職員数は教員、事務員、ペダゴゴ、アシスタント、ST、PT すべて含めて、子どもと同人数の教職員が勤務している。低学年(6-10歳)2学級、中学年(10-14歳)3学級、高学年(14-18歳)2学級あり、1学級約8人の子どもに7,8人の教職員が対応していた。全教職員が同じ時間に勤務するのではなく、交代勤務制であった。教室には台所(写真1)があったり、作業療法を行ったり、リハビリ・ストレッチ・トレーニングを行ったりする部屋(Fys/Ergoterapien)や感覚統合療法を行う部屋などがあったりした。

子どもの個別学習スペースは柵で区切られており、それぞれの子どものスケジュール(写真2)が写真や絵と共に掲示されていた。教員の写真も掲示されており、誰と活動するかも重要な情報のようなようだった。

参観した音楽の授業では5人の子どもで授業が始まり、2人途中から合流したため計7人に対して教員2人、ペダゴゴ1人、ペダゴゴアシスタント1人、実習生1人が指導していた。活動の終わりが視覚的にわかるタイマーを使用していたり、教職員は話すときに手話のようなサインを使いながら説明を行っていたりした。歌唱の後、タンバリンやシェイカー等の小さな打楽器演奏、太鼓、木琴等の大きな楽器演奏、バケツを楽器代わりにスティックで叩くという演奏の内容であった。教員は楽器を鳴らす時と鳴らさない時を理解させる指導が難しいと指摘していた。

教員は、子どもが学ぶことや子どもがどこまで到達するかを考えて、授業計画を立てている。ペダゴゴは、着替えや生活についての支援が主であった。また、どのように指導したら子どもが教員の立てた計画の目標を到達できるか、「どのように」という部分に注目して指導しているとのことであった。

3.1.2. 訪問調査考察

音楽の授業で主指導やピアノを弾いているのは教員であったが、子どもの支援は教員とペダゴゴの役割はほぼ同

じであり、チームで授業を行っていた。より専門的な能力が求められる指導には、チームとしてのコラボレーションが重要になる。

ユニバーシティ・カレッジ・コペンハーゲンのペダゴギー養成課程で使用されるテキスト⁶においても多様な専門家によるコラボレーションの重要性が強調されている。例えば ADHD、軽度の自閉症、強迫性障害(OCD)、不安などの精神障害のある子どもの指導では、ペダゴギー、教員、心理学者、ソーシャルワーカーが参加して指導をした経過が示されている。

以上の観察からペダゴギーは教員の指導計画のもと授業では支援的役割、日常生活の指導では主指導的役割を担っていると考察した。



写真 1 教室の一部

写真 2 個別スケジュール

写真 3 集会ができる広い教室

3.2. Frejaskole 特別学校

3.2.1. 訪問調査結果

子ども数約 110 人に対して、教員やペダゴギーは約 90 人勤務していた。自閉スペクトラム症がある子どもを特に専門に教育する特別学校であり、子ども全員が自閉スペクトラム症の診断を有していた。学習集団が 14 グループ編成されている内の 4・5・6 年生の年齢の子どもが在籍しているミドル学級(グループ 6 と呼ばれていた)を参観した。子どもは 8 人で、7 人が男子であった。教員は 4 人(そのうち 2 人はパートタイム)で、ペダゴギーは 2 人という担当体制であった。

訪問日の授業内容は、デンマーク語や算数、外国語や宗教、音楽などであった。教員は担当教科があり、それによって、教える学年も変わる。朝の会では、毎日ニュースを見る。1 人の女子と 1 人の男子は別の部屋で過ごしていたが、残りの 6 人で、ニュースの動画を見て、コメントしたり振り返りを行ったりしていた。部屋は 3 つあって、一人ひとりに区切られたスペース(写真 4)も人数分あった。それぞれの子どもに対して一日の予定が貼られていたり、作業課題が与えられていたりするなど、構造化されていた。デンマーク語、算数、個人活動では、デンマーク語と算数の 2 つのグループに教員が分かれて教えていた(写真 5)。子どもは教員の与えた課題に取り組み、課題が終わったら課題を変える。デンマーク語を学習していた子どもが算数を学ぶ、というようなルーティンの活動内容であった。

教室内の掲示には、ある状況が自分にとってのどれくらいの「問題」なのか、その気持ちの程度を視覚的に表す教材があった。他にも「フレキシブルマン(写真 6)」⁷とあって、うまくいかないときや予定通りに進まなかったときにフレキシブルな行動ができたならたまるスタンプを使用していた。そして誰かに親切にしたらたまる「グリーンフットプリント(写真 7)」という教材が使用されていた。教員とペダゴギーも授業の中でソーシャルスキルを始めとしてどのように指導すればいいのかを考えており、訪問した特別学校では教員とペダゴギーの役割は混在しているようであった。教員は特別教育について大学で学んできたわけではなく、働いているうちに知識などを得た、と言っていた。ソーシャルスキルなどの知識や指導方法は「フレキシブルマン」などを開発した Michelle Garcia Winner⁸の文献等を参考にしていた。

3.2.2. Frejaskole 特別学校におけるインタビュー結果と考察

以下がインタビュー結果である。

表 1 Frejaskole 特別学校におけるインタビュー結果

<p>Q1 ペダゴギー(または教員)が大事にしていることは何か</p> <p><u>回答者：学級担任ペダゴギー</u></p> <p>外の世界に出たときに必要なスキルを教えていくこと,他の人とどのようにかかわっていくか,また自分の言動がどのように影響するかなど,社会的なかかわりの部分(ソーシャルスキル,ソーシャルリレーション,ソーシャルビヘイビア)を指導している.またここは学校であるので,教員が授業をしているときに,教員の話をよく聞くことや席に着くように促すなど,アシスタントのようなこともペダゴギーの役割である.ゲームや活動の中での振る舞い方,ルールなどを教えている.子ども一人ひとりのアプローチや支援も変わってくる.外の世界に出たとき,「どのように」というところが大事である,例えばどのように買うか,どのように料理をするかなどを丁寧に指導している.</p> <p><u>回答者：学級担任教員</u></p> <p>担当教科は,デンマーク語,芸術,歴史,料理</p> <p><u>回答者：学級担任教員</u></p> <p>担当教科は,デンマーク語,芸術,宗教(大学卒業時の免許はないが,必要だったので自分で勉強して教えている),デザイン(木工)</p> <p>大事にしていることとして,子どもの目線に立って考えること.特に自閉スペクトラム症のある子どものため,社会性の問題と学習に関することの学びをつなげることである.モチベーションを上げるためにも,授業での目的を明確にする.また,寄り添い(Take care)ながらも前に進める(Push)こととのバランスも大切にしている.成功した時や,子どもが良いことをしたときに,ただ褒めるのではなくて,なぜ「Good」なのかも伝える.また,急な予定変更は子どもによっては大きな問題になる.ただしスケジュールを示すことも大切であるが,社会に出てから,予定通りに進まないこともたくさんあることを学ぶ必要がある.エピソードとして,ある日,音楽の教員が風邪で休んで,授業がなくなってしまった.そのため活動が散歩に変更になったが,ある男の子が「行きたくない,いやだ」とずっと言っていた.しかし,一緒に行くことを促し,男の子は外に出て気持ち良さを感じることができたことがあった.昼食も,偏食の子どもが多い.なんでも試してみる,やってみたら案外できるということも促し,体験させたい.</p>
<p>Q2 教員と比較してペダゴギーの専門性は何であると考えるか</p> <p><u>回答者：学級担任教員</u></p> <p>教員は,子どもが学ぶことに責任を持たなければいけない.ゴールがある.ペダゴギーは,社会性の部分を大切にしている.特別学校では教員とペダゴギーの役割は混ざっている部分も多い.</p>
<p>Q3 配慮の必要な子どもへのアプローチの仕方や,個別の支援計画・指導計画の書き方を教えてほしい</p> <p><u>回答者：学級担任教員</u></p> <p>個別の計画は年に1回作成し,5月に評価する.</p>
<p>Q4 就学時の引継ぎの制度や仕組みについて</p> <p><u>回答者：学級担任ペダゴギー</u></p> <p>引継ぎ資料があって,就学前教育機関から上がってくる.学年ごとに引き継ぐ.資料以外には,顔を合わせての教職員同士の会議がある.</p>

このように教員は担当教科がありその指導を行う.ペダゴギーは学校卒業後,社会に出たときに必要なスキル,例えば

人とどのようにかかわっていくか、また自分の言動がどのように影響するかなど、社会的なかかわり、社会的スキルを中心に指導している。

専門家間の協働において適切な移行と引き継ぎは、目的を念頭に最適に機能する必要があることが指摘されている。教員が科目を教えている間、ペダゴギーは適切な教室環境を整えている。その他の専門家も家族と子どもの観察に基づいて、医療関係者は彼らの情報・知識をソーシャルワーカーに伝え、ソーシャルワーカーはその家族のための特別な支援を手配することなどができる⁹との指摘もある。

今回インタビューした教員とペダゴギーは特別教育の知識を得て特別学校に勤務しているわけではないようであったが、ペダゴギーとしての子どもの発達に関する知識や日常の指導方法は、特別学校の子どもの指導や支援につながっていた。この特別学校においても教員とペダゴギーは、ともに学級経営を行っていて、チームでの指導を行っていた。



写真4 個別学習スペース



写真5 デンマーク語テキスト



写真6 フレキシブルマン



写真7 グリーンフットプリント

3.3. Øresundsskolen 特別学校

3.3.1. 訪問調査結果

子ども数は111人、1学級の子どもの数が約8人、教員数37人である。教員の他にペダゴギーがほぼ同数雇用されている。学級は13学級あった。見学した学級は、子どもが8人、教員3人、ペダゴギー3人、アシスタント1人で構成されていた。訪問日は、個別の学習、水泳、運動、遊びが主な活動内容であった。

教員は主に朝から15時までの勤務、ペダゴギーは昼から夕方までの勤務であった。教員は、デンマーク語や算数、英語などの科目を中心に教えるため、午前中は基礎教科を中心とした内容、午後はソーシャルスキルやアクティビティを中心と

した内容の時間割を組んでいる。子どもに負担がないように、毎週決まったスケジュールにしている。この学校の子どもは、全員知的障害があり、多くの子どもは自閉スペクトラム症を併存していた。その他に車いすを使用するなど肢体不自由のある子どももいた。

この日は、12-14歳の学級を中心に見学した。風邪が流行っていて、8人中5人の子どものみ登校していた。教員は8時くらいに学校に来て、スクールバスに合わせて8時20分に玄関に子どもを迎えに行く。子ども全員がスクールバスで来るわけではなく、自分で公共交通機関を使ってくる登校する子どももいる。スクールバスで学校に到着しても教室まで自分で来られる子どもや自力では教室に来られない子どもがいるため、支援の必要性に応じて支援する。

子どもは教室(写真8)に来たら、iPadでスケジュールを確認する。教室は1学級に対して4つ割り当てられており、朝の会の前の個別の課題学習では、それぞれ個別の部屋に分かれて、区切られたスペースで課題(写真9、写真10)を進めていた。朝の会では、日付や天気、出席を確認する。その後ニュースを見て話し合いを行う。ニュースの内容を確認する場面もあった。この活動は毎日行うとのことであった。必要な子どもには刺激を減らすためについててを用意したり、集中する時間を決めて意識させるためにタイマーを使ったりなどをしていた。教室や机などには声の大きさ表や掛け算の表など、様々な視覚支援があった。

水泳の授業では、学校にはプールがないため、他の学級も含めて水泳に参加する子どもと一緒に水泳施設に移動して活動した。水泳の授業の時も、どのような計画で、どのような順番で活動するのかのカードが使われていたり、プールを1往復したごとにレゴブロックを箱に入れて、あとどのくらいで水泳の活動が終わりなのかを視覚的にわかるようにしたりするなどの工夫があった。水泳の授業は週に1回あるそうで、水泳の活動を行うにあたっては保護者の同意を得ているとのことであった。

午後は、学校内を巡回した。いくつかの学級で絵や記号を教職員が書いたものを見たま書く活動としてのTegnediktat(写真11、写真12)¹⁰を行っていた。一画書いたら教員の手本を見る、また一画書くという順番で、これは、絵や文字の学習につながるとのことであった。

高学年の音楽の授業は発表会がもうすぐあるようで、発表会の練習を行っていた。バンド演奏で、子どもは楽しそうに集団で演奏していた。この時、ペダゴギーと教員の役割の違いは明確ではなかったが、午後の活動ではほとんど教員とペダゴギーは協働しているとのことであった。

その他に、身体を使った学びや活動がデンマークで重視されていること、学級やグループ分けは、社会性や学習のニーズ、関係性によって決めていることが指摘された。作業療法士や理学療法士も学校に配属されており、個別に子どもを支援していた。週に1回、学級担当の教職員は会議を行うそうで、この時には何人かの子どものみについて、現在どのような状況か、課題があるかを確認し、学級全体として翌月はどのような活動にするかなど話し合うとのことであった。このような教職員間の協議が子どもの学びの連続性につながっていると考察した。



写真8 教室



写真9 個別学習の部屋



写真 10 個別学習の学習内容

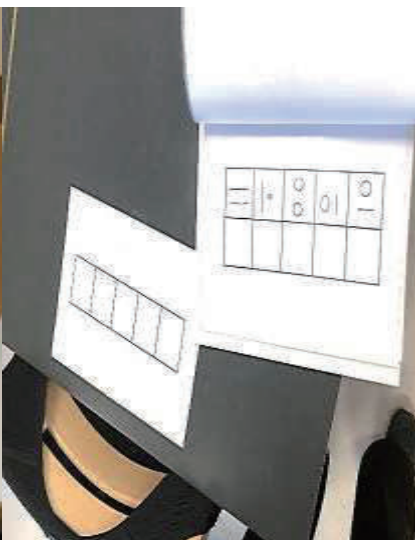


写真 11 Tegnediktat 指導



写真 12 Tegnediktat 指導による絵

3.3.2. Øresundsskolen 特別学校におけるインタビュー結果と考察

以下がインタビュー結果である。

表 2 Øresundsskolen 特別学校におけるインタビュー結果

Q1 ペダゴグ(または教員)が大事にしていることは何か

回答者：学級担任教員

学級で一緒に活動する中でも、個を大切にしている。集団活動に参加することも学びであり、可能な限り集団活動に参加させることを心掛けている。子どもがどのような反応をしているのかなど、一人ひとりの子をよく見る必要がある。他には、子どもが不快にならないような空間の保障や活動内容に焦点を当てること、時間を与えることも必要であると考えている。

回答者：学級担任ペダゴグ¹¹

子どもの現状を把握し、子どもはどの位置にいるのか、次のステップは何か考えることである。活動するときは、子どもの動機づけを常に考えていくことも大切にしている。例えば、生き物が好きな子どものエピソードである。その子どもと最近テントウムシについて学習した。まず本を読んでテントウムシについて知り、実際にテントウムシを外に探しに行ったり、えさの草を集めたりした。この活動は課題の「自然」に当たる。さらに、活動中は視覚的スケジュールの提示を欠かさない。必ず書き出して、どんな流れで活動するのか見てわかるようにしている。グループで活動するときには子どもの IQ のレベルはだいたい同じくらいで分けているが、学ぶ方法は一人ひとり違うことを念頭においている。

Q2 教員と比較してペダゴグの専門性は何だと考えるか

回答者：学級担任教員

教員は朝から 14 時もしくは 15 時頃まで勤務する。何を子どもたちが学ぶかに焦点を当てている。また、指導計画を考えるのは主に教員の役目であり、ペダゴグは指導計画に沿って指示をする。教員が学習に関してはより責任があると考えられる。ペダゴグは、日々の構造的な事柄が主な指導対象で、例えば、着替えや手洗い、感情のコントロール、また、交通ルールなどの社会に出たときに必要になってくる力や振る舞いを指導する。

回答者：学級担任ペダゴグ

ペダゴグは、英語に訳したら、Teacher of social skills であると考えられる。午後の活動は、教員とペダゴグが協働で行っている。特にソーシャルスキルや身体について、感情、多様性、どのように他人とかがかわっていくかを指導する。教員は

学習,ペダゴギーは子どもに焦点を当てている.彼らがどのように発達,成長していくのか,社会の一員になるということに重きをおいている.

また以下に示す「9H」¹²が大切である.

Hvad skal jeg lave – indhold (何をすべきか - 内容)

Hvorfor skal jeg lave det – skabe mening (なぜするのか - 理にかなっているか)

Hvornår skal jeg lave det – tidspunkt (いつするのか - 時間)

Hvor skal jeg lave det – placering (どこでするのか - 場所)

Hvem laver jeg det med – voksne, børn (誰とするか - 大人,子ども)

Hvordan laver jeg det – metode (どうやってするか - 方法)

Hvor længe skal jeg lave det – tidsperspektiv (どれくらいの時間か - 見通し)

Hvor meget skal jeg lave – mængden (どれくらいするか - 量)

Hvad skal jeg lave bagefter – indhold (その後どうするか - 内容)

Q3 配慮の必要な子どもへのアプローチの仕方や,個別の支援計画・指導計画の書き方を教えてほしい

回答者: 学級担任教員

資料の記入はほぼペダゴギーが行う.教員は教科指導の部分,ペダゴギーは日々の活動全般の部分を入力する.保護者の要望を書く項目がある.例えば「子どもが一人で電車を使って学校に行けるようにしたい」など保護者の意向もくみつつ学習活動に活かす.年に1回計画が作成されて,年に3回評価する.

Q4 就学時の引継ぎの制度や仕組みについて

回答者: 学級担任教員

8月から新学期が始まる.6月に担当教員とペダゴギーが就学前教育機関を訪問して,子どもの様子を見たり,会議を開いて就学前教育機関のペダゴギーと話したりする機会がある.引継ぎの資料もある.担当教員とペダゴギーは,どの学級を次年度担当するか事前に知ることが出来るため,教職員側の心構えの時間も十分にある.また子どもが学校という場に慣れるために,入学前に写真や学校の説明が書かれた冊子が各家に配布される.

以上のようにこの学校では,時間によって教員とペダゴギーの勤務が区切られていた.午前中に頭がすっきりしている状態で教科を教えるために教員は朝からの勤務をしていた.午後は音楽などの活動的な学習が生まれ,ペダゴギーが中心になって教えていた.ペダゴギーは教員の支援も行っていた.このことから,教員は学習について,ペダゴギーは教員とも協働しながら日常生活,ソーシャルスキルの学習や実技・芸術科目の指導を行っていると考えた.

教員もペダゴギーも,学校に勤務しながら午後は大学に通う人,カウンセリングの資格を取得した人などいるなど,働きながら自分の知識を高めたりすることが出来る環境がある.先行研究においてペダゴギーと教員の協働での指導は,長年にわたってデンマークの特別教育を特徴づけてきたという指摘がある.チームで障害のある子どもに最も適切な教育支援について決定し,保護者との緊密な協力関係を育み,強化してきたのである¹³.他にも教室内では,アシスタント教員が障害のある子どもを支援しており,言語療法士,学校心理士,カウンセラー,作業療法士および理学療法士を含む他の専門家も同様に,特別教員と連携して支援を提供していることも紹介されている¹⁴.

さて,引継ぎに関しては担当する子どもが事前にわかるため,就学前教育機関に担当の教員とペダゴギーが訪問の機会がある.そのことが子どもの学びの連続性につながっていると考えられる.

4. 総括

本稿では,デンマークの特別学校におけるペダゴギーの役割や専門性として,移行支援体制の視点も包括して,実地調査に基づく調査研究の結果を示した.

以下,本稿で明らかになったことを記す.

まず訪問した特別学校は,知的障害と自閉スペクトラム症に特化した特別学校であった.どの学校も作業療法やリハビリ・ストレッチ・トレーニングの部屋や感覚統合療法の部屋があり,作業療法士や理学療法士が勤務していた.集団学習のみならず個別学習があるため,個別の学習スペースが柵で区切られており,それぞれの子どものスケジュールが写真や絵と共に掲示されているなど構造化されていた.毎日ニュースを見て話し合いするという活動も多く取り組まれていた.教室内の掲示には,ある出来事が自分にとってどれくらいの問題なのかの気持ちの程度を表す教材や自分の予定通りに進まなかったときに柔軟な行動ができたらたまるスタンプのような教材があった.また誰かに親切にしたらたまるグリーンフットプリントという子どもの動機づけを高める工夫も多く見られた.ソーシャルスキルなど指導方法は,参考にする資料や本が準備されており,子どもが活動しやすくなるための工夫や指導方法を協議する環境が整備されていた.

特別学校におけるペダゴギーの役割や専門性は教員と融合しているようであった.それはチームで学級経営を行っていく意識が高いからであると考察した.一方で,ペダゴギーと教員の役割や専門性の相違点としては,教員は教科指導を主に行い,子どもの学習について責任を持っていた.一方でペダゴギーは,子ども自身に焦点を当てていて,子どもがどのように発達,成長していくのか,社会の一員になるのかということに重きをおいていた.特にソーシャルスキルや

社会に出てからの振る舞い方,感情のコントロールなど,学校以外の場面で必要なスキルを教えていくことがペダゴギーの専門性であると推察した.

また,教科の学習活動においてペダゴギーは,教員が授業をしているときに教員の話をよく聞くことや席に着くように促すなど,学習指導のアシスタントとしての役割も担っていた.

先行研究において,デンマークの文脈における社会教育学(Social pedagogy)とは,ケア(身体的および感情的),社会化と対人スキルの発達,社会参加と責任を教えること,個々のスキルの開発¹⁵であるとの指摘がある.また Halse¹⁶は図2のような「ケアについての4側面」を示している.4側面とは,真ん中に中心がある三角形であり,教育関係教職員がケアを理解するためのモデルである.そしてまたそれは子どもの幸福,健康および発達に関連している.左下の **Supervision** は,子どもより知識や経験を持った大人が,子どもを危険から防ぐことを意味する.右下の **Stimulation** は子どもに挑戦させること.挑戦の機会を与えることを意味する.中心の **Participation** は一番重要で,子どもが自分で参加することである¹⁷.この文献はデンマークの大学のペダゴギー養成課程で使用されている教材であるため,この概念も念頭にして,

支援を行っている」と考察した.

移行支援については,就学前教育機関に教員とペダゴギーが訪問して就学予定の子どもの様子を見る機会があったり,関係教職員同士の会議が行われたりする.引継ぎ先の学校の教員やペダゴギーが就学前教育機関に訪問できるため,関係教職員は事前に準備を行うことが出来る.引継ぎ資料もあり,就学前教育機関から学校の移行のみならず学年間の移行でも引き継がれていく.他にも子どもが学校という場に慣れるために,学校入学前に学校に関するわかりやすい説明冊子が各家庭に配布されるため,子どもも保護者も就学に向けての準備ができる可能性が高いと考察した.

教員とペダゴギーの聞き取り調査からは,教員とペダゴギー間の協働による相互作用の利点が指摘された.先行研究においても複数の教職員がかかわることで子どもに対してより早く,より集中的で充実した個別の支援が可能になったとの指摘があった.先行研究にも個々の学習科目で子どもを支援するだけでなく,社会的能力など多様な視点で子

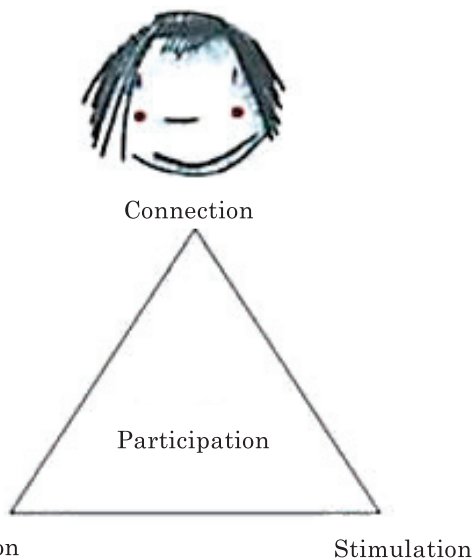


図2 ケアについての4側面

出典: Halse, J.A. (2007) *Negativ social arv: Om tidlig indsats overfor risikobørn og deres familier*. Kroghs Forlag, Dafolo.

どもを支援することができるとの指摘があった¹⁸。

以上から、ペダゴゴは教員と協働する場面では子どもがよりよく学校生活を送ることができるような環境整備を行い、ペダゴゴが主指導となる場面では社会への移行や将来を意識した日常生活場面で必要とされるスキルや技能、知識に関する指導を行い、教員が主指導となる場面としての学習指導においては補助的役割を担うことが期待されていると考察した。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 18K0279318K02793 の助成を受けたものである。

註・引用文献

- 1 事例として本稿ではユニバーシティ・カレッジ・コペンハーゲンのカリキュラムを参照した。
<https://ucc.dk/paedagoguddannelsen/merituddannelsen/uddannelsens-opbygning>(2019年10月20日参照)。
- 2 Holtoug, A.G.Red(2019)Social-og specialpædagogik i pædagoguddannelsen, Hans Reitzels Forlag pp.18-36.
- 3 櫻谷眞理子(2015)個を大切に作るデンマークの保育に学ぶ—自立性と自己決定を重視した実践—『立命館産業社会論集』51(1)pp.67-84.
- 4 千葉忠夫(2011)『格差と貧困のないデンマーク 世界一幸福な国の人づくり』PHP 新書,p.104.
- 5 小谷正登(2012)デンマークの保育者ペダゴゴの専門性に関する一考察—リレバト大学社会教育学部における養成課程と実践を基に—『臨床教育学論集』武庫川臨床教育学会,5,pp.27-40.
- 6 Højholdet, A.(2016)TVÆRPROFESSIONELT SAMARBEJDE ITEORI OG PRAKSIS, HANSREITZEL, pp.25-54.
- 7 Superflex: A Superhero Social Thinking Curriculum Package というタイトルの本で、社会的思考をはぐくむカリキュラムである。Stephanie Madrigal と Michelle Garcia Winner によって開発された、
<https://autismawarenesscentre.com/shop/social-skills/superflex-a-superhero-social-thinking-curriculum-package/> (2019年10月20日参照)。
- 8 SocialThinking®(ソーシャルシンキング), <https://www.socialthinking.com/>の創設者。医学的臨床家(Certificate of Clinical Competence, CCC)と言語病理士もしくは言語療法士(Speech - Language Pathologist, SLP-SLP)。社会性において困難性のある人の支援を専門としている。
<https://www.pearsonassessments.com/professional-assessments/products/authors/deleted/winner-michelle.html>(2019年10月20日参照)。
- 9 op.cit.6, Højholdet, A.(2016)pp.25-54.
- 10 Tegnediktat 紹介 Wbsite, <http://sprogkiosken.dk/2015/11/01/tegnediktat/>(2019年10月20日参照)。
- 11 ちなみに、今回聞き取りを行ったこの方は、セクシャルコンサルタントとソーシャルスキルコンサルタントの勉強をして、他の学校にも訪問してカウンセリング活動も行っているとのことであり、自身は「カウンセリングペダゴゴ」と名乗っていた。
- 12 特別なニーズのある子どもに関する支援 Website, <https://saerligebehov.dk/de-8-her/>(2019年10月20日参照)。
- 13 MARILYN Friend, M., Cook, L., Hurley-Chamberlain, D., Shamberger, C.(2010)Co-Teaching: An Illustration of the Complexity of Collaboration in Special Education, Journal of Educational and Psychological Consultation, Volume 20, Issue 1, pp.9-27.
- 14 Ibid.MARILYN Friend, M., Cook, L., Hurley-Chamberlain, D., Shamberger, C.(2010)pp.9-27.
- 15 2019年3月に行われた University Collage Copenhagen における Lise Halkier 講師の講演資料 Social Pedagogy in Denmark.
- 16 Halse, J.A.(2007)Negativ social arv: Om tidlig indsats overfor risikobørn og deres familier. Kroghs Forlag, Dafolo.
- 17 Eriksen, K.E., Halkier, L.(2015)Children with special needs everyday life in daycare facility, Paper UCC.
- 18 Böhm-Kasper, O., Dizinger, V., Gausling, P.(2016)Multiprofessional Collaboration Between Teachers and Other Educational Staff at German All-day Schools as a Characteristic of Today's Professionalism, pp.29-51.

令和元年 (2019) 11月11日受理

令和元年 (2019) 12月31日発行

